

出石町の家、アートスペース油亀には、いつも静かな時間が流れている。1945年6月29日の岡山上空襲でも焼けずに残った古い民家が積み重ねてきた時間が現在と重なり、忘れていた何かを思い出させてくれるようである。この場所で2010年より、美術家・太田三郎は「出石町の家」と題して戦争をテーマとした作品展を行い、2012年晩秋、3回目をもって、最終回を迎えた。

太田は、広島原爆投下で困った「Stamp-Map of Japan and Korea」(1990年)以来、20年余りに亘り主要な仕事のひとつとして、戦争をテーマとした作品群に取り組んできた。その初期作品の一つが、油亀でも展示された「POST WAR 46-47 兵士の肖像」(1994年)である。太平洋戦争での行方不明兵士の肉親が新聞に掲載した兵士の顔写真を、切手にしたその作品を初めて見た時、筆者は静かな衝撃を受けた。すでにこの世にいないであろう若者たちへ、長い歳月を経て呼びかける家族の想いが、小さな切手に凝縮されている。死者に向けられたその小さな声は、作品を見る者が耳を傾けなければ、聞き逃されてしまうかもしれない。だが一度聞き取ると、死者と生者とを結びつけるその声は、「なぜ？」の一語を心に刻み込む。「なぜ彼らは人を殺すため、そして死ぬために戦場に送り込まれなければならないかったのか？」。

存在感を物量で主張することなく、小さく一見頼りないが、力強い。太田の作品は戦争を告発しようと大上段に振りかぶることもなく、静かな声を発している。

兵士や中国残留孤児の顔写真、被爆の跡を残す樹や地蔵、無言館の戦没画学生の作品などの「POST WAR」シリーズに、出石町の展示では、岡山空襲での戦災遺跡が加わった。岡山市のホームページ「岡山市内に残る戦災の遺跡」で公開されている岡山空襲の遺跡を訪ねた太田は、空襲の惨状をありありとイメージし、ひび割れ焼け焦げたそれらの遺跡を写真に撮って小さな切手にした。

切手は太田にとって重要な素材の一つでもある。「Date Stamps」や「Seed Project」等のように、長年継続して制作されている太田の仕事に欠かせない切手の特質として、時間と距離(場所)が刻印されると同時に、時間と距離を越えてメッセージを伝える役割が挙げられる。戦争を語り継ぐ切手は、より広い地域へと伝播しつつ、過去と現在を結び、さらに未来へと繋がっていく。

その他の作品においても、死者の声に耳を澄ますよう、太田は繰り返し私たちに促す。油亀での第1回展の主題となった「きけ わだつみのこえ」。文庫本の「きけ わだつみのこえ—日本戦没学生の手記—」は、一頁毎に破られて桜の木の枝に結び付けられ、漏斗や熊の置物に貼り付けられる。桜のように潔く散れと、戦争に駆り出された学徒出陣の若者たちの無数の声は、漏斗に流された液体のように無限の闇に流れ込み、声は熊の言葉なき唸り声に変わる。「ただ私は人の命を奪おうとする猛獣的な闘争心は今持たぬのである。そうしてこの憐れな、まるで渦中にすいこまれるような思いで、私は戦に征くのである。」(「きけ わだつみのこえ」より)。熊の置物や漏斗は、この兵士の述懐に照応するかのように思われるが、こうした日用品を用いることで悲壮な主題の作品に、図らずも物哀しいユーモアがほのかに漂う。

このような日用品を用いた太田作品の特徴の一つとして、端整なイメージの切手作品とやや趣きを異にした、そこはかとないユーモアが挙げられるだろう。そこに時として一見控え目ながら、鋭い批判が表れる。太田の意図しない所であったが、最終回に出品された「Rain Drawing」に、筆者は痛烈な批判を感じた。ミッキーマウスなどのディズニーキャラクターがプリントされ、水を含ませた筆でなぞるだけで塗り絵ができる「みずぬりえ」を、太田は雨に打たせた。1945年6月29日未明の岡山空襲で、雨のように空から焼夷弾が降り注いだことを思い起こしながら。水滴が滲んだ塗り絵は生々しく、見る者をぎょっとさせる。戦後、日本はアメリカと友好関係を結び、アメリカの豊かな文化を享受した。そのこと自体の是非を問うつもりはないが、子どもたちの夢の国・ディズニーランドの人気者たちに滲んだ水滴が、空襲で子どもたちに降りそそいだ火の雨に関連付けられた作品を前にすると、愕然とさせられるのだ。戦後日本国民が豊かさを追い求める過程で、死者たちを都合よく忘却してきた、その精神の空白がいかに無残なものであるかということ。

しかし太田には声高に戦争批判をする意図はなく、戦争を「してしまう」人間の存在を浮き上がらせたい、と言う。そのため、油亀に展示された物の中には、一見戦争と関わりのないように見えるものもある。戦前に作られた武者人形は、出石町の家展示されると、人を戦争へと駆り立てる「男らしくあるべき」という価値観をあらわにする。端午の節句に飾られる人形に託された、男子が持つに好ましいとされる性質、勇ましさや強さは、そのまま好戦性へ繋がる。戦争という非日常の出来事だけを問題視して戦争批判するのではなく、人間の存在の仕方自体を問題にしなければいけないのではないのか。そう太田は言う。存在の根底にある好戦性や破壊衝動など、他者を損なう負の衝動につき動かされ、戦争をしてしまう人間。そうした存在に哀しさを感じながらも、太田は戦争を避けがたいものと運命論的に捉えてはいないだろう。

人間の存在の根底には負の衝動があるのと同時に、他者の心情に共鳴して、その哀しみや痛みに寄り添おうという限りない優しさがある。出品作の中に、リメイクした戦時中の塗り絵の少女の肌の部分や、国旗をイメージして作られた日の丸部分を、赤チンで塗った作品がある。これらの作品で使用されている赤チンには、岡山空襲で傷ついた人々を介護しなければならないという太田の想いが込められている。何の罪もないのに空襲で死んだ人々の無念に寄り添い、できることなら過去を遡り、焼夷弾による火傷を手当てして苦しむ人々を癒したい、作品を見る人にその感情を共有してもらいたいと、太田は淡々と作品を提示しつつ願う。

日本各地に設置されている戦災記念室等での展示では、戦争の遺品の生々しさが、見る者に戦争の傷跡をダイレクトに伝える。しかし太田には、ものをそのまま展示して実際にある物に語らせるだけでなく、作品として何かを付け加えることによって、メッセージをより深めようという意図がある。媒体が物であれ言葉であれ映像であれ、生々しく伝えられた体験は、受け手の心にも傷を与えてしまうことが往々にしてある。広島県出身の知人は、小学生の頃に繰り返し授業で見た被爆地の映像が、長い間悪夢に現れたという。一方、戦争をテーマとした太田の作品はどこまでも静かだ。

特別のものを用いず、身の回りにある、誰でも手に入るものを用いるのが、太田が作品を作る時のスタンスであるという。日常生活へ注がれる細やかな眼差しは、市井の名も無き人々の日常が壊されることへの、静かな抗議へ向かう。日用品に手を加え、日常を変容させることで、戦争を「してしまう」ものとは対極の、存在の根底にある最も美しいものに触れ、共鳴作用を起こすこと。それが、太田が油亀で行おうとしたことであるように、筆者には思える。話が大きくなるが、アートの持つ重要な意義の一つに、この共鳴作用があげられるのではないだろうか。

勿論、災禍に遭われた方々の心の傷は、追体験などでは計り知れないほど深く、安易な共感や慰安はかえって傷口を広げることにもなるだろう。それでもなお、と太田の作品は私たちに語りかける。それでもなお、傷ついた人々の痛みを感じ、それを癒したいと願うことは必要なのだと。

人間はたやすく傷つく脆い存在である。しかし同時にまた、自らを癒す力を持っている。戦争の傷を忘れようとして放置した末に、目に見えず、感じることもない深い所で、傷が致命的に悪化している、それが精神の空白に生きる私たちの現在の姿だとしたら、傷は癒されねばならないだろう。空襲で傷ついた人々を癒さねばならない、という太田の想いはそのまま、現代の私たちにも重ね合わせることができるだろう。

「あの戦争は何だったのか？」考えることを放棄して67年余りの月日が流れた。戦争の不条理に向けられた「なぜ？」という問いに対する答えが、見つかることは決してない。それゆえ私たちは、個を滅し去る圧倒的な暴力に対して、人間の存在の根底にある最悪のものに対して、自らを明け渡さないようにしよう。そしてまた、個としての自己が他者である被災者の痛みと共に、癒しようのない過去の傷を手当てしようとする、存在の根底にある最も美しいものを響かせることが、今を生きる私たちの傷をも癒すのだということを、ひっそりと心にとどめておこう。

死者の声に耳を傾けよと、ささやかな所作で日常を変容する太田の作品と対峙することは、過去の傷を現在に引き受けることでもあるだろう。それは決して後ろ向きの行為ではない。太田はそっと死者に告げる、「あなたたちを決して忘れない」と。この言葉により傷に手当がなされ、緑なす未来に向けて精神の荒れ地に、種子が蒔かれるのである。

## ■ 展覧会概要

太田三郎「出石町の家 —日本戦没学生の手記「きけわだつみのこえ」に寄せて—」(アートスペース油亀/岡山)

2010年8月1日～15日

[http://aburakame.web.fc2.com/contents/exhibition/100801saburo\\_ota/house\\_in\\_izushicho.html](http://aburakame.web.fc2.com/contents/exhibition/100801saburo_ota/house_in_izushicho.html)

太田三郎「出石町の家 —戦後66年岡山空襲に寄せて—」(アートスペース油亀/岡山)

2011年8月1日～15日

<http://aburakame.web.fc2.com/contents/exhibition/110801otasaburo/houseinizushicho.html>

太田三郎「出石町の家 —岡山空襲に寄せて—」(アートスペース油亀/岡山)

2012年11月1日～11日

[http://aburakame.web.fc2.com/contents/exhibition/121101saburo\\_ota/house\\_in\\_izushicho2012.html](http://aburakame.web.fc2.com/contents/exhibition/121101saburo_ota/house_in_izushicho2012.html)

展覧会の企画・構成：アートスペース油亀

太田三郎作品に関するお問い合わせはこちらまで

■ アートスペース油亀

〒700-0812

岡山市北区出石町 2-3-1

phone : 086-201-8884

mail : aburakame@gmail.com

<http://www.aburakame.com>



アートスペース油亀

岡山市北区出石町 2-3-1 tel : 086-201-8884

<http://www.aburakame.com>